＜前回：宗教改革と国民国家・国民文学＞

（１）宗教改革とその意義

１．宗教改革の思想内容（三大スローガン）

宗教改革の思想内容については、改革者によって幅があり（例えば、聖餐論争）、簡単な要約は困難であるが、その共通項を宗教改革の三大スローガンと言うべきものに集約することは可能であろう。

①「信仰のみ」（信仰義認論）、②「聖書のみ」、③「万人司祭説」

２．アウグスブルクの宗教和議（1555 年）：帝国議会がルター派を容認。諸侯に、それぞれの領邦でカトリクとルター派のいずれを選ぶかの選択の権利が与えられる。

↓

カルヴァン派の信仰や、個人の信仰の自由は認められなかった。

３．再洗礼派（成人洗礼＝個人の信仰の自由を主張）の排除。

近世の限界。個人の自由、あるいは政治的な平等は、近代を待つ必要があった。

（２）宗教戦争から近代へ

４．宗教改革は西欧世界の近代への移行を促進した。

1)近代文化の成立を後押しする。近代的な自律性や人格性（人権）といった理念の成立基盤となる。

2)混乱を通した近代的システムの成立

（３）ウェストファリア条約と近代国家体制の成立

５．30 年戦争の講和条約（ミュンスター条約とオスナブリュック条約の総称）

近代国際法の出発点となる条約。ドイツを中心に 30 年間続いたカトリックとプロテスタントによる宗教戦争は終結。条約締結国は相互の領土を尊重し内政への干渉を控える。これによって、現在にいたる国家群によって構成される新たなヨーロッパ的秩序（その大枠）が形成された（＝ウェストファリア体制）。

７．国民国家へ

国家内部の全住民・構成員を「国民」として統合することによって成り立つ国家。単一の民族がそのまま主権国家として成立する国家概念やそれを成り立たせるイデオロギーを伴う（一民族一国家　→　民族と国家との微妙な関係・緊張関係）。しかし外部には植民地体制。　→　国民の形成と国語　→　国民文学

（４）二つの近代のモデル――アメリカ独立戦争とフランス革命

８．賀川豊彦「社会革命と精神革命」（1947 年、『賀川豊彦全集　第４巻』キリスト新聞社）

９．ハンナ・アーレント（『革命について』ちくま学芸文庫）

・革命の意義＝自由（権力に加わる積極的自由。古代ギリシャのポリスにおける自由人たちの政治活動をモデルとする）の空間を創設することと目的としてそれに成功すること。

・フランス革命は流産したと言わざるを得ない、アメリカ革命は部分的とはいえそれに成功した。

10．政教分離の二つの形。

アメリカ／フランス

８．　近代文学１　：英文学

（１）宗教改革と西欧近代

1．「聖書のみ」（聖書主義）の理念が歴史的な現実となるには、数百年の時間が必要であった。＝近代的西洋の成立！

・聖書の近代語（英語、ドイツ語、フランス語）への翻訳

・印刷技術の普及と出版システムの確立　　・初等教育の普及（識字率）

2．聖書の近代語への翻訳　→　西欧国民文化の基礎

・西欧近代の国民文学は、キリスト教との密接な関わりにおいて論じ得る。宗教は文化の母体である。

・近代の基本原理としての自律性・自由。

近代文化（特に、啓蒙主義的近代）は宗教的基盤からの解放を目指した。

・西欧近代の国民文学は、宗教的基盤からの分離において、それ自体として論じ得る。

3．ヨーロッパ近代におけるキリスト教的伝統の多様性：

多様性における統一性（聖書→翻訳、ラテン語→近代語）。

・イタリア、フランス、ドイツ南部：ローマ・カトリック教会

・ドイツ、北欧：ルター派　　・ロシア：ギリシャ正教会（ロシア正教会）

・イギリス：英国国教会（聖公会）　・オランダ、スイス：カルヴィニズム

↓

地域・文化圏：キリスト教的伝統と文化・文学との関わり

（2）英国国教会と 19 世紀のイギリス

4．英国国教会：Via Media・中道（カトリックとプロテスタントとの）

国民国家の統合、諸階層のゆるやかな協調→貴族的文化と労働者への配慮

キリスト教社会主義、労働者伝道

5「文学に関するもろもろの定義が現在のようなかたちをとりはじめたのは、実のところ、『ロマン主義の時代』以降のことだ。『文学』という言葉の中に現代的な意味が発生したのは十九世紀なのだと言ってもよい」（T・イーグルトン『文学とは何か――現代批評理論への招待』大橋洋一訳、岩波書店、1985 年、30 頁）

6．「ヨーロッパにおける近代以前の作品は、後に確立した近代国家の枠組みの中に取り入れられて理解されるようになりました。英文学の場合はその典型例と言えるでしょう。一九世紀ヴィクトリア朝時代に確立した帝国体制・覇権を背景にとして『オックスフォード英語大辞典』（ＯＥＤ）全十二巻が完成され、『ケンブリッジ英文学史』全十五巻が書かれるようになり、英文学の伝統というものが考えられるようになりました。」（高柳栄一『英文学とキリスト教文学』創文社、2009 年、6 頁）

「識字層の拡大と国教会および福音主義的な非国教会の布教活動がこのような悲惨な目に遭っていた労働者階級に対して活発に行われたことも事実です。そして、そのような中で、彼らに向けた宣教的なキリスト教大衆文学作品の創作活動が芽生えたのでした。とにかく、ヴィクトリア朝時代、キリスト教の各教派は活発に大衆文学作品を生み出していったのです。」(9)

（3）ディケンズ『クリスマス・キャロル』

7．チャールズ・ディケンズ（Charles John Huffam Dickens, 1812-1870）。ヴィクトリア朝を代表する国民的作家。下層階級を主人公とし、弱者の視点で社会を諷刺した作品群を発表した。『オリバー・トゥイスト』など。

８．『クリスマス・キャロル』（1843.12）

主人公：スクルージ(Scrooge)、心の狭い・けちな金の亡者。

場面：クリスマス・イブ、スクルージは寝入ったばかり。

物語：三人の精霊が、主人公を彼の過去、現在、未来に案内する。

過去：貧乏で惨めな少年時代、愛する女性よりも金を取る。

現在：主人公が雇う雇用人ボブ・クラチット一家の貧しいが心温まるクリスマス食事の場面。嫌われ者の雇い主のために祝杯をあげるボブ。一家の子供で病弱なティム坊やがやがて亡くなる予言。

未来：主人公が亡くなって喜ぶ人々。

自分の罪の深さ・惨めさに目覚めた主人公が、一夜にして、慈善心溢れる人間に生まれ変わる。

９．『クリスマス・キャロル』の成功。キリスト教の教理（罪、隣人愛、人間の再生・新生・救済）を、小説・文学として見事に表現。英文学の一つの機能。

（４）C・S・ルイス

10. イギリス児童文学へのキリスト教の影響。19 世紀以降のイギリスは、『不思議の国のアリス』のルイス・キャロルなど、児童文学の黄金時代。

11. ルイス(1898-1963)：文献学者・言語学者から作家へ。神話的題材、SF 小説（『ナルニア国物語』など）と宗教的著作。友人トールキン（1892-1973）との交流・影響。作家の創作は、神の創造行為と類比され得るような、準創造行為である。しかし、神の創造が規範・源泉。

12.「ルイスは一六歳になった頃にはすでに確固たる無神論者であった。・・・ルイスは神など存在しないと言っていたが、第一次世界大戦中の体験により、ルイスは神を怒りの対象とし、神に対して激しい怒りを持った。」（マクグラス、22）

「トールキンとルイスとの友愛は二〇世紀の英文学にとって重大な結果をもたらした。この友愛がトールキンの『指輪物語』とルイスの『ナルニア国物語』とを生み出したと言っても過言ではない。」（50）、「「批判的友人」、励まし批判してくれる「人生のメンター」」（51）

「オックスフォード大学」「物書きの卵たち」「Ink+ling ＝ Inklings」

「「インクリングズ」の名で記憶する非凡な人々の集団である。」（54）、「インクリングズは二〇世紀における最も重要な文筆家クラブ」（55）

13. 物語を読解する行為と物語的自己同一性。

「きみたちはどの物語の中に生きているのかね」（マクグラス、63）

「私たちは誰でも物語のうちに生きている。物語は私たちに人生のかたちを与える「メタナラティブ」である。・・・私たちの中のある者は社会の進歩という西洋特有の物語を想定し、その中で生きている。文明は（技術的に、社会的に、道徳的に）常に改善されていると考えている。」（64）

「ナルニア国歴史物語の核となっているのは、キリスト教の「大いなる物語(big story)」である。それは創造、人間の堕罪、救済、そして終末の到来という「壮大な歴史物語」であって、それを想像力を駆使して翻案した物語である。」「アスランの物語は、単にそれについて私たちが聞くだけのものではないということである。私たちはその物語の中に入り、それの一部となるよう、招かれている。これは理解しやすい点ではない。ルイスは神のよ

り大いなる物語により、私たち自身の物語に意味と方向と目標が与えられることを理解するように望んでいる。」(77)、「ナルニア国歴史物語においてルイスが成し遂げた驚くべき業績は、読者にこの「大いなる物語」のうちに住むことを可能にしたことである。読者がその物語の中に入り込み、その一部となることがどういうことかを感じ取ることを可能にしたのである。・・・もしこの七部作を、出版された順序で読むと、読者は、救世主の到来つまり「アドヴェント」を扱う『ライオンと魔女』によりこの歴史物語の中に入り込む。『魔術師のおい(The Magician's Nephew)』は創造と堕罪の問題を扱い、『さいごの戦い(The Last Battle)』は古い秩序の終わりと新しい創造の到来（アドヴェント）を扱う。」(78)

＜参考文献＞

１．安森敏隆・吉海直人・杉野徹編『キリスト教文学を学ぶ人のために』世界思想社。
２．高柳俊一『英文学とキリスト教文学』創文社。
３．浜林正夫『イギリス宗教史』大月書店。
４．ロバート・Ｆ・ウィアマス『宗教と労働者階級　メソジズムとイギリス労働階級運動　1800-1850』』新教出版社。
５．Ｃ・Ｓ・ルイス『栄光の重み』（C・S・ルイス宗教著作集８）新教出版社。
６．本多英明『トールキンとC・S・ルイス』笠間書院。
７．Ａ・Ｅ・マクグラス『Ｃ・Ｓ・ルイスの読み方――物語で真実を伝える』、『憧れと喜びの人　Ｃ・Ｓ・ルイスの生涯』（教文館）

＜Ａ・Ｅ・マクグラス『Ｃ・Ｓ・ルイスの読み方――物語で真実を伝える』＞

１　壮大なパノラマ
　　人生の意味についてＣ・Ｓ・ルイスが考えたこと
２　信頼すべき旧友たち
　　友愛についてＣ・Ｓ・ルイスが考えたこと
３　物語で創られる世界
　　『ナルニア国』と物語の重要性
４　世界の王とライオン
　　アスランとキリスト者の生き方について
　　Ｃ・Ｓ・ルイスが考えたこと
５　信仰について語る
　　護教論の方法についてＣ・Ｓ・ルイスが考えたこと
６　学問・知識を愛すること
　　教育についてＣ・Ｓ・ルイスが考えたこと
７　苦しみについてどう立ち向かうか
　　痛みについてＣ・Ｓ・ルイスが考えたこと
８　さらに高く、さらに深く
　　希望と王国についてＣ・Ｓ・ルイスが考えたこと
補論１　Ｃ・Ｓ・ルイスに関する参考文献
補論２　Ｃ・Ｓ・ルイス略歴
注